近代日本文学の黎明と日本演劇の興隆にその生涯をささげた人

坪内逍遙

文明開化の足音は、一人の偉大な近代文学者の誕生を予感させました。

安政6年（1859）5月22日、坪内逍遙は、太田代官所の手代であった坪内平右衛門とその妻ミチの10人目の子として誕生しました。

時代は、江戸から明治へと大きく変わろうとする時だけに、彼自身も文久元年（1861）、皇女和宮が徳川家茂に嫁ぐため、中山道太田宿を通った時には、その行列と遭遇して、時代の移り変わりを感じていたのかもしれません。

逍遙は、父平右衛門47歳、母ミチ39歳の時の子でした。逍遙の言葉を借りるなら、父親は、「極潔癖家で、几帳面、極無愛想な、上にも決して世辞をいったことのない役人」だったそうです。

また、母親は、「生得の芸事が好きでもあり、幾（いく）らかの芸術的嗜（たしな）みがあった。私（注、逍遙）が、比較的早くから草双紙に親しんだのは、母が太田の田舎にいてさえ、始終のように何等かの新旧小説類を取り寄せていたからであった」と述懐しているように、逍遙の人生に大きな影響を与えたそうです。

父が代官所の職を辞して隠居の身となったのは、明治2年（1869）。逍遙、10歳の時でした。

その後、明治9年（1876）17歳で、上京。開成学校（現在の東京大学）に入学、明治16年（1883）に、東京大学を卒業するとともに、東京専門学校（現在の早稲田大学）の講師となったのは、24歳の時でした。

明治18年（1885）には、江戸時代からの勧善懲悪主義を捨て、人間内部を写実的に描写して、芸術としての価値を高めた近代小説の理論書『小説神髄』を刊行。また、同年、当時の学生の生きざまを写実的に描写した小説『当世書生気質』を出版したところ、大きな反響を呼び、明治の文学界に衝撃を与えました。逍遙26歳の時でした。

その後、『細君』などの小説を出版しましたが、明治20年（1887）ごろからは、演劇界の改革に傾注し、演劇に対する理論の研究と実践書であるいくつかの脚本を完成させました。舞踊劇の理論書『新楽劇論』や史劇『桐一葉』などを次々と発表しました。

逍遙が、シェークスピアに文学的影響を受けたのは、明治17年（1874）ごろからで、それまでの東洋文学とは、異なることに大きな驚嘆を覚えたことがきっかけとなりました。以後、ライフワークとして『ジュリヤス・シーザー』などの翻訳と研究を次々に手がけました。

逍遙が、『シェークスピヤ全集』40巻の個人訳を完成したのは、昭和3年（1928）、69歳の時でした。さらに、昭和8年（1933）には、現代語訳を目指した『新修シェークスピヤ全集』を刊行しました。これまでに、個人訳の全集を完成させたのは逍遙をおいてほかになく、近代文学界に大きな影響を与えたといわれています。

晩年まで、演劇界に情熱を注いだ逍遙でしたが、昭和10年（1935）2月28日朝、こよなく愛した熱海の居宅双柿舎（そうししゃ）にて、家族に見守られ静かに息を引き取りました。享年75歳。翌日の新聞には、「我が文壇の巨匠　坪内博士逝く」など、彼の死を惜しむ見出しが紙面を飾りました。

逍遙は、晩年ふるさと太田を二度訪れています。最初は、明治45年（1912）7月。二度目は大正8年（1919）5月に、妻センとともに訪れています。

彼は、「太田にておひたちし幼きころ　里のこらと木の実ふりことといふをして　遊びにしむかしなつかしく　逍遙人」と残したように、幼い時、太田で兄や友とツバキの実で遊んだことを、生涯忘れることができなかったようです。

カット　高橋和男さん

写真は、大正8年（1919）5月再訪の際、虚空蔵堂前にて撮影。左から、有賀好風、林小一郎、坪内逍遙、妻セン、赤塚半児。撮影者は、鈴木写真館　鈴木清次郎。